

ゴシック小説の趣向とその現代的意味

玉 崎 紀 子

(1)

20世紀も世紀末になった今、18世紀末から19世紀初めにかけて大流行であったゴシック小説が再び注目され始め、評価が高まってきている。その中で元祖であり、又、後世への大きな影響故に注目すべき作品はもちろん Horace Walpole の *The Castle of Otranto* (1765)¹⁾ である。この小論はこの作品を初めとする代表的なゴシック小説の特性を抜き出し、それがどのように小説の発展に寄与し、現代まで続く伝統となっているか、又現代にどのような問題を提起しているかを考えてみようとする試みである。

The Castle of Otranto は十字軍遠征の頃のイタリアの古城を舞台にして、同じ頃流行の感傷小説のモチーフ、「迫害される乙女」を描く。謎を持つ古城における美女にせまる恐怖という 'sublime' の美学²⁾に従い、ゴシックの全ての原型的要素、すなわち、魂を高揚させる terror を賞賛する picturesque³⁾ と魂を凍らせ死滅させる horror をもつ grotesque⁴⁾ とを統合している。

さらに、城が乙女を閉じこめる牢獄のイメージをもち、女性中心のロココ文化から男性的文化の主張となる暴力的なサディズムの予兆をも示している。牢獄、サディズム、危険、恐怖は人間の意識下の潜在意識を眺めようとし、自己を求める主題の前触れである。秩序ある18世紀の文化に反発するこの特性は、危険な自己の衝動、美のための美を求める19世紀末と変らない破滅的文化の終末的特徴を暗示している。

こういう文化を示す Otranto のゴシック様式の城は、中世修道院のイメージをもつ柱廊 'cloyster' にかこまれた中庭をもち⁵⁾、閉め切りの高い塔

があり、'picturesque'の理想⁶⁾どおり、不規則で多様性をもつ造りで、現在修理中で廃墟にも似た雰囲気がある。この城のモデルは作品執筆の動機である Walpole のみた夢の中の城とされているが、執筆前に訪れた Cambridge の Trinity College に無意識的に影響をうけており、自身の Strawberry Hill というゴシック様式の城の建築からも、彼の並々ならぬ、ゴシック様式に対する熱中がうかがわれる。城はゴシック的恐怖の源、悪夢であると同時に、憧れやまぬ夢の実現ともいえるのである。

この Otranto 城に、城主の長男 Conrad の許嫁として幼い頃より住んでいた Isabella は、Conrad が結婚式当日不可解な死を遂げたため、思いがけない状況に追いこまれる。城主 Manfred は、その祖父が城を奪った潜主という不安定な相続権の故に、長男を失うと「相続権は移る」⁷⁾ という不吉な予言の実現を危惧する。そこで、初代城主の血統をひく Isabella と自らの結婚によって相続権を守ろうとする。妻子もあり、いわば義父たる Manfred に結婚を迫られ、Isabella はこの閉じられた城から逃亡する。Manfred の企みは彼の相続権を確実にしようという野望のためである。と同時に、一方では義父たる Manfred が息子の嫁といえる Isabella にせまるのは、近親相姦の一種であり、Isabella の 'loath', 'abhor' (p. 91) という Manfred を憎悪する語から、性的暴力におびえ恐れる弱い乙女という原型が明らかになる。又、彼女の 'impious' (p. 24) 'sinful' (p. 94) という語からは神を恐れぬ、Manfred の反キリスト教的態度を示し、これまでの抑制され、閉じられた世界からの解放を求めるものである。しかも Manfred は現在の妻 Hippolita を世継ぎを産む可能性がない故に無効として近親結婚という理由で離婚し、Isabella と結婚するという 'adulterous' で (p. 50) 利己的な意図を、修道士 Jerome に述べ、教会の助けを要求する。これは Manfred が二重の意味で近親相姦の深みにはまっていることを明らかにする。さらに、正当な城主たる Isabella の父 Frederic が登場してからは、Manfred は、娘 Matilda に心を奪われたらしい Frederic に Matilda との結婚を交換条件に、Manfred への城の引渡し要求を撤回することを承諾させる。不釣合な程若い娘への肉欲に支配さ

れた二人の父親に対し、三人の女性はいずれも自己犠牲的気高い愛を示す。Isabella と Matilda はいずれ劣らぬ美しい娘で共に Theodore を百姓の若者としか知らぬ時から愛するが、Isabella は、Theodore がより Matilda を愛しているのを知って自分の恋を隠し、Matilda の恋を助けようとする。二人とも愛の理想故に、父の年令の求婚相手を忌み嫌い、たとえ父の権威をたてにせまられても、屈しない。二人の娘は、性的倒錯的求愛の正反対の極地、キリスト的愛を表わす。中でも Matilda は 'holy charity' (p, 71) に基いて、父が閉じこめた Theodore を塔から逃がし、臨終の時 Isabella と Theodore に結婚をすすめる自己犠牲を示し、Gothic heroine の聖女の伝統を作る。一方 Isabella は Matilda と比較すれば、悪人からまで恋される性的魅力をもつ女性として描かれ、もう一方の Gothic heroine の型を示す。最後に Manfred の妻 Hippolita は、'virtuous' (p, 50, 90, 91) と繰り返し語られ、Isabella の告白を信じず、夫の悪口を許さないと怒るほどであるが、いよいよ Manfred の野望を納得すると、修道院入りを決意し、悪人 Manfred のために、自己犠牲的に彼の野望にそう行動を、それが神のもとに誤っていても、決意する程である。

しかしこの作品の人物像で注目すべきなのは、美德をもつ heroine 達ではなくて、悪人でありながら、自らの野望にひきづられつつ悩む Manfred の人物描写である。これは、閉ざされた深層からの解放を主張するロマン派的人物像であると同時に、ヴィクトリア朝で展開される心理的に複雑な人物像の原型となって小説の隆盛をひきおこす原因になっているのである。

ゴシックロマンスはこのような父、又はその代理人となっている悪人から逃れる乙女というモチーフを必ずもつ、しかも逃げても逃げても危険があるので、崇高と結びつく恐怖が持続する。Isabella は Manfred の求愛求婚をしりぞけ、しかし義理の父たる Manfred の城の中に居ては逃れようがないと覚って、地下通路から城に隣接する修道院へと逃亡しようとする。もっとも城だけでなく修道院自体も囲われ閉じられた世界なので、Isabella の恐怖は相変わらず続くのであるが。

Yet where conceal herself! how avoid the pursuit he would infallibly make throughout the castle! As these thoughts passed rapidly through her mind, she recollected a subterraneous passage which led from the vaults of the castle to the church of St. Nicholas. Could she reach the altar before she was overtaken, she knew even Manfred's violence would not dare to profane the sacredness of the place; and she determined, if no other means of deliverance offered, to shut herself up for ever among the holy virgins, whose convent was contiguous to the cathedral. In this resolution, she seized a lamp that burned at the foot of the staircase, and hurried towards the secret passage.

The lower part of the castle was hollowed into several intricate cloysters; and it was not easy for one under so much anxiety to find the door that opened into the cavern. An awful silence reigned throughout those subterraneous regions, except now and then some blasts of wind that shook the doors she had passed, and which grating on the rusty hinges, were reechoed through that long labyrinth of darkness. Every murmur struck her with new terror; - yet more she dreaded to hear the wrathful voice of Manfred urging his domestics to pursue her. She trod as softly as impatience would give her leave, yet frequently stopped and listened to hear if she was followed. In one of those moments she thought she heard a sigh. She shuddered, and recoiled a few paces. In a moment she thought she heard the step of some person. Her blood curdled; she concluded it was Manfred. Every suggestion that horror could inspire rushed into her mind. She condemned her rash flight, which had thus exposed her to his rage in a place where her cries were not likely to draw any body to her assistance. (25 - 26)

Edmund Burke は darkness を説明し、暗闇 (darkness) と黒さ (blackness) の概念は同じようなもので、黒さの方がずっと狭く「部分的な暗闇」である。黒い物体は無の空間、暗闇は自分の安全度を不明にするから怖い

という。たとえば恐しい幽霊，お化けの出る背景など，この自己保存という本能にかかわる苦痛は terror を与え，sublime と説明する⁸⁾。

この逃亡と暗闇の恐怖の他に，Manfred が正当な城主でないため，城と相続についての不吉な予言⁹⁾があり，城を破壊する程の大きなカブトは中世的城のイメージと共にゴシック特有のメガロマニア¹⁰⁾を示す。Manfred が Isabella に結婚をせまると人物が脱けだして動きしゃべる初代城主の肖像画，巨大な城中の複雑な造り，数多い大きな階段¹¹⁾，幽霊のでる gallery，血の出る像，お告げをする幻といった趣向は全て後世のゴシック・ロマンスに受けつがれるものである。

これらの超自然の特徴は，恐怖，危険，苦痛を表わすだけでなく，その極限として数多くの死があるが，それも sublime のものである。これらは秩序から自然への衝動・欲求を示し，整形庭園の秩序から自然を壊し，アルプスの高くそびえる大自然に憧れる Walpole が唱え始めた picturesque の理想の追求と重なりあっているのである。又，高い山の大自然にも似た，巨大建築の衝動をひき起し，Strawberry Hill, Fonthill Abbey, Abbotsford Abbey などの現実に住むには大きすぎる巨大な建築によって gothic 建築の大流行を生み出すことにもなる。文学と建築の理想が結びついた一大文化が18世紀末を支配していたといえよう。

こういう趣向にあふれる城は多様な意義をもつが，この城に付随し，Isabella が逃げこむ修道院は，もう一つの gothic 的謎の源泉である。そこには過去に秘密をもち，過去をすてて，修道女となった人物がおり，その過去の秘密が，城の謎を解き，解決する手がかりである。この作品の修道院 St. Nicholas の修道士，Father Jerome は実は Count Falconara でその妻は，摘出子なしで死したとされた初代 Alfonso が十字軍遠征中にシシリーでなした娘の子であった。従って Count Falconara の息子とわかった Theodore は母の血筋から Otranto の初代城主 Alfonso の相続人であると最後に明らかにされる。

Ricardo の罪が子孫に報い Matilda が死に，偽城主¹²⁾ Manfred の血筋が絶えた時，雷がおこり，地はゆれ，城は廃墟となる。そのガレキの中で

巨大に膨張した Alfonso の像が「真の相続人は Theodore」と告げる。

暗闇の中の城の地下道で、又迷路のような洞窟のある城近くの暗い森で逃げる Isabella を助けるのはその生れ育ちともにアルカディア以来の牧歌的 peasant¹³⁾である Theodore で危難の乙女を救う騎士が真の城主¹⁴⁾というモチーフは、今後も続くことになる。

このように *The Castle of Otranto* は、廃墟、高い塔、中庭、柱廊からの秘密の地下道、修道院、暗い森、迷路のような洞窟といった picturesque の理想にそった背景をもち、幽霊のぞる閉め切りの室や、不思議な肖像画、破壊的象徴のカブトや不吉な予言等にみちた恐怖と謎の gothic castle、超自然的謎だけではなく、血を流す決闘と幾人もの死、正当な相続人を明らかにする恐しい自然・稲妻、地震といった sublime の要素と、危難の乙女を救う騎士、邪悪な墮落した大人に対する無垢な美少女というロマンスの原型をも示している。

(2)

Fonthill Abbey 建築²⁾によって Walpole と同じく Gothic 建築崇拝で有名な William Beckford は、絵画的であっても堅固という面を無視した途方もなく高い塔も、*Vathek* (1787)¹⁵⁾ という東洋趣味の作品によっても、彼特有の Gothic 的側面を明らかにする。又、彼の *Vathek* により、Gothic のある重要な局面が深められ、発展させられていることに注目しなければならない。それは何よりも、恐怖と神秘を grotesque な極限¹⁶⁾にまで求めようとするものである。他のゴシック小説と異なり、恐怖のための恐怖、神秘のための神秘を求めようとはせず、「個人の欲求というものの重要さと恐しさ」¹⁷⁾ を主題としている。この恐しさを示すために、picturesque, (sublime, beautiful を含んだ) から grotesque にすすみ、terror でなく horror を示すことになる。それは奇異な東方を舞台にして、神的なものから離れたものやさまざまな欲望によって示される。*Vathek* の母 Carathis の魔術、*Vathek* 自身の美食その他の快樂の追求、地底の魔人のための 50

人もの子供を殺す残虐さ、又この子供をたべたいという魔神の欲望、Gulchenrouz という従弟と牧歌的な恋人である Nouronihar を肉欲のために自分のものにする Vathek の欲望、最後に最大の恐怖の悪魔エブリスの城、地獄に3人とも堕ち心臓がこがされ続けるという結末などいずれも grotesque を示すものである。

しかし、城、イカロスの高い塔、上ったり下りたりする階段、空中で切れている階段、Arabian Night に匹敵する Vathek の宮殿の異国趣味は Vathek 自身を示し、Otranto に萌芽のみられた城と同一視される人物という点で Gothic 的特徴をおしすすめたものである。そして何より重要なことは、主人公として Vathek という悪人を持ち、悪人の複雑な心理をのぞき、そして Vathek という一人の人間の欲望を描くことによって単なるゴシック・ロマンスの特徴をとおりこし、近代小説の自我の領域に入ろうとしていることである。

その他ゴシック的伝統としては Nouronihar と Gulchenrouz がアルカディアにいる無垢なよく似た子供同志と (mirror, double) いった牧歌的イメージをもつこと、しかし従姉弟で近親相姦的關係にあることに注目したい。もう一つ 19 世紀ゴシック特に American gothic にくり返し現われることになる 'Faustian pursuit of forbidden knowledge'¹⁸⁾ のテーマが重要である。Vathek は、母にそそのかされ、Nouronihar にも誘われ、求めてはいけぬ禁じられた知識を求めて、地獄に堕ちなければならなくなるのである。

この 'forbidden knowledge' の悲劇は、この時代のゴシックでは Mary Shelley の *Frankenstein* (1818)¹⁹⁾ でさらに追求される。怪物は sentimental で愛を求め、孤独に苦しみ、Victor に恋人を造ってくれと頼む。この感傷性の点で怪物と Victor は、'mirror image'²⁰⁾ であるし、hero と villain の 'double'²¹⁾ を表わすともいえる。人間を造り出すという神も恐れぬ行為は、イカロスの高みに登ろうとする Vathek よりも、神を凌駕しようとする知識への欲求に動かされているのであるから、さらに神の怒りを誘うはずである。その結果、造られた怪物はまさに grotesque²²⁾ の代表と

なる。

Vathek はイスラムを、現実とは遠く離れた異国故にロマン派の憧れを誘う場所として舞台にしたが、*Frankenstein* は sublime の感情をもたせるものとしてロマン派の理想の美しいモンブランとレマン湖の風景を描く。しかし、怪物を登場させて、この奇想天外な物語に reality をそえるために、これを北極探険をしている船乗りの現実が、ありそうもない Victor の話をはさむという3部構造で表わしたのもゴシックの常套手段である。このような点で *Vathek* と *Frankenstein* はゴシックの一派としての特徴をもつ。

(3)

この grotesque の傾向、特に Matthew Gregory Lewis の *The Monk* (1796) に反発して *The Italian* (1797) を書いたという Ann Radcliffe の作品はあらゆる点で、世界を絵のように見る、picturesque のみごとな実践例である。*The Mysteries of Udolpho* (1794)²³⁾ の有名な Udolpho 城を Emily が初めて見る個所はその好例である。

Towards the close of day, the road wound into a deep valley. Mountains, whose shaggy steeps appeared to be inaccessible, almost surrounded it. To the east, a vista opened, that exhibited the Apennines in their darkest horrors; and the long perspective of retiring summits, rising over each other, their ridges clothed with pines, exhibited a stonger image of grandeur, than any that Emily had yet seen. The sun had just sunk below the top of the mountains she was descending, whose long shadow stretched athwart the valley, but his sloping rays, shooting through an opening of the cliffs, touched with a yellow gleam the summits of the forest, that hung upon the opposite steeps, and streamed in full splendour upon the towers and battlements of a castle, that spread its extensive ramparts along the brow of a precipice above. The splendour of these illumined objects was

heightened by the contrasted shade, which involved the valley below.

“There,” said Montoni, speaking for the first time in several hours, “is Udolpho.”

Emily gazed with melancholy awe upon the castle, which she understood to be Montoni’s; for, though it was now lighted up by the setting sun, the gothic greatness of its features, and its mouldering walls of dark grey stone, rendered it a gloomy and sublime object. As she gazed, the light died away on its walls, leaving a melancholy purple tint, which spread deeper and deeper, as the thin vapour crept up the mountain, while the battlements above were still tipped with splendour. From those too, the rays soon faded, and the whole edifice was invested with the solemn duskiness of evening. Silent, lonely and sublime, it seemed to stand the sovereign of the scene, and to frown defiance on all, who dared to invade its solitary reign. As the twilight deepened, its features became more awful in obscurity, and Emily continued to gaze, till its clustering towers were alone seen, rising over the tops of the woods, beneath whose thick shade the carriages soon after began to ascend.

（Ⅱ，226－7）

Sir Walter Scottによれば、この Udolpho 城の描写は形容詞の漸新な使い方により、Ann Radcliffeの才能を見事に表わしている。

次々と後に連なっている山頂は、人を寄せつけないように見えるだけで、実は城の世界へと読者を誘い込む。城は高いと同時に低く、閉ざされているながら一部が開いていて、夕陽に照らし出されつつ、半ば影になっている。このような反対の言語の組合せは、城を効果的に表わしているが、同時に Burke のいう sublime にそって意識的にあいまいになっている。²⁴⁾

城自体の造りも、明暗対比と、深さ、高さを持つ垂直構造、巨大さ、力、山頂に続く城の連続性と無限性と sublime の条件²⁵⁾そのまま、ゴシック小説の城の描写の伝統を作り出したといえる。

Walpole の伝統に従い、このイタリアの古城 Udolpho が主要な舞台ではあるが、*The Castle of Otranto* と比べずっと大部で複雑な、この作品は、第1巻に女主人公 Emily の生家、南フランスの牧歌的な城 La Vallée、第2巻の初めで Montoni の Venice の邸をかいま見たあと、2巻、3巻は Apennin 山中にあるゴシック様式の Udolpho 城、第4巻は再びフランスの明るい風景で Le Blanc という城という3ヶ所を背景とする。真中のゴシック部分が、感傷小説風の牧歌的物語にはさまれた三部構造になっていると E. MacAndrew²⁶⁾の説く通りであるが、さらにゴシック小説のもつ明暗対比が、城の名称で示される伝統が、ここに始まることを指摘したい。La Vallée と Le Blanc はいずれも牧歌的で明るく、後者は白色そのものの名で、Udolpho は wolf の連想があり黒く暗いゴシックのイメージをもつ名称である。これは Scott にもさらに W. Collins の *The Woman in White* にも表われることになる²⁷⁾。

しかしこの作品で重要なのは、女主人公がこの3つの背景を往き来する際の途中の風景描写である。当時流行の picturesque の絵を見て風景描写をした彼女は、「小説のサルヴァートル・ローザ」と呼ばれたことで有名であるが、小説に風景描写の重要性を教え、又風景描写によってそれを見る人物を描いた点で後の小説に大きな影響を与えたといえよう。

The scene of barrenness was here and there interrupted by the spreading branches of the larch and cedar, which threw their gloom over the cliff, or athwart the torrent that rolled in the vale. No living creature appeared, except the izard, scrambling among the rocks and often hanging upon points so dangerous, that fancy shrunk from the view of them. This was such a scene as *Salvator* would have chosen, had he then existed, for his canvas; St. Aubert, impressed by the romantic character of

the place, almost expected to see banditti start from behind some projecting rock, and he kept his hand upon the arms with which he always travelled.

As they advanced, the valley opened; its savage features gradually softened, and, towards evening, they were among heathy mountins, stretched in far perspecive, along which the solitary sheep-bell was heard, and the voice of the shepherd calling his wandering flocks to the nightly fold. His cabin, partly shadowed by the cork-tree and the ilex, which St. Aubert observed to flourish in higher regions of the air than any other trees, except the fir, was all the human habitation that yet appeared. Along the bottom of this valley the most vivid verdure was spread; and, in the little hollow recesses of the mountains, under the shade of the oak and chestnut, herds of cattle were grazing. Groups of them, too, were often seen reposing on the banks of the rivulet, or laving their sides in the cool stream, and sipping its wave.

The sun was now setting upon the valley; its last light gleamed upon the water, and heightened the rich yellow and purple tints of the heath and broom, that overspread the mountains. (I, 30 — 30)

サルヴァートル・ローザが描いたであろうような風景と Radcliffe のいう通り、けわしい断崖、さかまく奔流、びょうぶのようにそびえる山、はげ山、山賊のとびだしそうな荒れはてた趣き、自然の雄大さがロマン派的感興を呼びおこす風景である。危険の伴う否定的な風景を危険なく見るだけであるため、sublime と感じることもできるのである。

この危険で sublime な前半の風景に対し、後半は同じくすばらしい風景であるが、荒々しい様子はなく、ずっと遠方まで眺望のきく、広々としたのびやかな牧歌的風景である。羊飼と羊の群れ、高山の中の一軒だけの羊飼の小屋、牛が草をはみ水を飲むゆるやかな小川といったアルカディアそ

のものの牧歌的な風景である。ロマン派的な孤独を示す風景であるが、それは sublime より beautiful のものであって、サルヴァトーレ・ローザの絵よりはクロードの風景画である。この後半の風景こそ、ゴシック小説がすたれた後、イギリス小説で愛好される田園風景のもとになるものである。この結果ヴィクトリア朝になって picturesque というとき、ややもすると sublime の要素がうせ、beautiful の要素のみという特徴になっていくのである。しかし広々とした美しいなだらかな田園風景にしても、高くそびえるアルプスの山にしても、Radcliffe の自然崇拜は、自然と神が近づく状況で、例えば人物描写として Emily の性格が描かれるより、Emily の心がみた風景で表わされる特徴を待つ。自然が人物の心の反映となっている。従って作者の共感が与えられている女主人公 Emily は自然と一体となり、自然を楽しんだり、風景にたとえようもない恐怖を感じとる。Emily は神に対するように広大なアルプスの自然を賛美する。‘romantic scenery’ (p. 27) を求め旅する Emily と父は開かれた自然を享受するが、悪人は自然の恩恵を与えられない。picturesque から grotesque へすすんだ、*The Monk* には開いた自然は存在しない。²⁸⁾

このように *The Mysteries of Udolpho* は grotesque を避け、picturesque な風景故に注目されるべきで、terrors はあっても horrors はないので、‘Monk’ Lewis や Maturin と比べて Radcliffe は ‘impeccably innocent and delicate’²⁹⁾ と評されている。従って、Radcliffe に対する Jane Austen の批判は、たとえ彼女の *Northanger Abbey* (1818) が Udolpho 城における Emily の経験をそっくり期待する Catherine Morland によって実人生とかけはなれた怪奇、超自然ばかり追求するゴシックへの熱中をやゆするものとしてすぐれているとしても、Radcliffe が、ゴシックの暗黒、頹廢の極としての grotesque を排除していることを忘れていない。むしろこのような極端なゴシック性、又極端な感傷性を Jane Austen は批判しているのであり、その点では Radcliffe も全く常識的で似ているといわねばならないのである。それゆえ Radcliffe がイングランドの日常的な人間性を描いていないという非難も Bonamy Dobrée の言う

通り 'fair'³⁰⁾ではない。むしろ Radcliffe は Jane Austen と同じ 'sense' を重んじる人物として女主人公を描き、Emily は道徳的教養小説の女主人公として十分に通用するといえる。Emily は幼ない時から感情に走らず sense に重きをおくように育てられる。Emily の 'susceptibility too exquisit' (p. 5) や, sensibility が魅力であったけれども a charm より a virtue を必要と思う父 St. Aubert は, Emily の精神をきたえようと努力した。なぜなら,

'A well-informed mind,' he would say, 'is the best security against the contagion of folly and of vice. The vacant mind is ever on the watch for relief, and ready to plunge into error, to escape from the languor of idleness. Store it with ideas, teach it the pleasure of thinking; and the temptations of the world without, will be counteracted by the gratifications derived from the world within. (p. 6)

と Emily の父 St. Aubert は「感情を感じないのはいけないが、感情過多の危険を知り感情を自制できるようになりなさい」(79-80) と何より 'romantic error' (p. 79) に対して注意する。この教育の結果、永遠に別れさせられるよりは駆落ち結婚をと愛する Valancourt に説かれてもそういう結婚は結局相手を不幸にすると考え断わり続ける。父の死後、父にも似た Count De Villefort によって、Valancourt が Paris ですっかり墮落したと知らされ、'heart' を信頼すれば (510)、相変らず誠実な Valancourt に望みはあると思いつつも、尊敬できない人を愛すべきではないと 'fortitude' (506) によって恋をあきらめようとする。Count の理性を信じ、自らも理性で恋をすてようとするのである。この2回の Emily の拒絶の時、感傷小説の伝統どおりの Valancourt の過度な感傷性に対し、Emily が分別により行動し、かよわき乙女とみえる女性が実は分別あり賢明な女性であるという伝統³¹⁾を作り出す。

Emily のこれほどの感情を抑え理性に従おうとする態度は、この作品の

悪女といえる Lady Laurentini の、抑えるべき 'strong passion' をもって生れたが、まわりの人々に heiress として甘やかされて育ち、父母の死後 youth and beauty がその weakness と重なって恐しい罪を犯すことになったという history と対照的であることに注目したい。Emily も Laurentini も豊かな感情、感受性をもって生れた共通点があり、さらに若くして父母を失なう。それまでの父の分別を重視する教育だけが Emily と Laurentini の相異点で、同じ若さと美貌に恵まれ恋をするが、Emily は、駆け落ちをことわるのに、Laurentini は恋にまけ、愛人にまでなり、嫉妬のあまり恋人 Marquis の妻を毒殺するという罪を犯し、その上恋人に捨てられ deranged のまま修道院で死ぬという不幸な人生を送る。長々と述べられた Emily の感傷小説的恋は、感傷小説とは異った Emily の fortitude により、幸わせな結果を得、Laurentini は全ての謎を解く形での 'history' によって Emily がこうなったかもしれない仮定を描く。

感傷小説風の Emily の恋は、中心部のゴシック的謎を信じられるようにするための一種の枠組であるが、さらにもう一つ Laurentini の身の上話により、縁どりされて、物語の真実味を増している。こういう物語の現実性に関わる枠組の他に、言うまでもなく、様々なゴシックの型どおりの謎と仕掛けが、他のゴシック小説とちがい、最後に合理的説明がなされ、何一つ超自然や怪奇でないことに、注目しなければならない。たとえば、Gascony の Emily の生家での Emily を描いた細密肖像画の消失は Emily を恋する Du Pont が盗んだのであり、Udolpho 城で Emily に話しかけ、又フランスのメロディを歌い奏でたり、秘密の通路で不思議な声を発したのも皆、Du Pont であった。Montoni に殺されたと思われた Udolpho 城主、Lady Laurentini はフランスの恋人 Marquis de Villeroi を追って自らの意志で城から失踪し、Emily が父の死の前に Chateau-le-Blanc の近くで、又その城に住むようになって聞くと、失踪した後 Sister Agness となった Lady Laurentini が気がふれて、心を静めるために森の中で歌う歌や lute であった。さらに Emily の父が焼き捨てるように遺言した手紙は Marquis de Villeroi の妻となった St. Aubert の妹が夫

の愛人 Lady Laurentini に毒殺された過去を葬むり、Emily に不幸な叔母のことを秘密にするためであった。Udolpho 城で皆が恐れおののいた veil に隠されたものは絵ではなく、Udolpho 城の先祖の一人が宗教上の罪のための祈祷用のろう人形の像であった。又、Chateau-le Blanc での Ludovico の失踪、閉め切りの室の物音は、城の地下室に財宝を隠した banditi のせいであった。このように全ての謎は物語の最後までに説明しつくされるのである。

怪奇と恐怖の物語でありながらこのような合理的な説明をすること、感傷的牧歌的恋物語と見える Emily の恋が、実は、Lady Laurentini と対照させて、教養小説的成長を語るもので Emily の感情ではなく sense が恋物語の展開の重要な鍵となることは、ゴシックの小説でありながら、ゴシック性を集大成し、ゴシックを超えた次の主流小説へそして現代へ続く伝統を Ann Radcliffe が作り出したことを示す。現代小説においても、小説を面白くしているのはゴシックから踏襲された趣向なのである。しかも、Radcliffe は Walpole から続いた伝統以外に、picturesque の風景賛美を小説に導入したが、同じくゴシック趣向でも新たなものをいくつか始めている³²⁾。

Radcliffe のこのようなゴシックの謎に対する扱いは、怪奇、神秘を決して無条件に受け入れてしまわず、合理的に説明しようとするのだから、「自分の想像力に色どられた知覚と実際の状況の違い」³³⁾ を示そうとする現代小説の現実的な態度と同じである。ゴシック的な悪夢や恐怖が実は現実の一部であることを指摘し、人間性についての認識を深めようとするのが現代小説の特徴なのであるから、ゴシックの型にそった、Udolpho 城のような、中まで見通せない、不可解な閉ざされた世界は、現代にもあり、その登場人物にとっても、読者にとっても内的恐怖を呼びおこす。スパイ小説、スリラー小説だけでなく、不条理小説においてもこのゴシック的趣向は重要な枠組であることに疑いはない。³⁴⁾ しかしそういう特定の分野でなくとも、求めるものを探して、いきあたるのは常に 'uncertainty'³⁵⁾ であるのが、現代の特徴なのではあるまいか。理性と感情という基盤を根底から揺

がした picturesque から sublime に至る中心のゴシック小説は、今でも、根源的不思議を探るために利用せざるをえない型なのである。

一度信じられない世界に入り、その世界から、主人公と共に読者も脱け出す。その際信じられない世界は粉々にうち砕かれ、読者は現実に戻れるのだが、その現実も又、信じられない世界での経験によって大きく変わってしまっている³⁶⁾というゴシック的衝撃は、現代を認識するための必要不可欠な手段なのである。

[注]

- 1) Horace Walpole, *The Castle of Otranto* (1765) (New York; Holt, Rinehart and Winstor Inc., 1963) 以下この作品の引用はこの版により頁数のみで示す。
- 2) Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1759) (New York; Garland Publishing, Inc. 1791)
- 3) Christopher Hussey, *The Picturesque : Studies in a Point of Views* (London and New York: G. P. Putnam's Sons, 1927, 1967)
- 4) terror と horror については, Raclcliffe の区別 (*New Monthly Magazine* (Vo 1. 7, 1862) が重要である。c.f. 'Introduction' to *The Mysteries of Udolpho* by Bonnamy Dobree p. ix
- 5) ゴシックの城の庭はこのように閉じた庭で、建物に囲まれた court であるが、19世紀の小説の城や country house では、ha-ha (隠れ垣) を使って区切るだけの、どこまでも眺望をえられる開いた庭となっていく。cf. 川崎寿彦『庭のイングランド』(名古屋大学出版会, 1983) pp. 303—5
- 6) 野島秀勝『自然と自我の原風景——ロマン的深層のために』上巻(東京:南雲堂, 1980) pp. 15—16
- 7) Horace Walpole, *ibid*, p. 114
Ricardo's posterity should reign in Otranto, until the rightful owner should be grown too large to inhabit the castle, and as long as issue-male from Ricardo's loins should remain to enjoy it という言い伝えが Manfred まで伝わっていた。
- 8) Edmund Burke, *ibid*, pp. 374—6
- 9) こういう運命的予言は, Sir Walter Scott, *The Bride of Lammermoor* (1819) の主人公 Master of Ravenswood に関して同様の例がみられる。
- 10) 高山宏『目の中の劇場』(東京:青土社, 1985) p. 111
- 11) Horace Walpole が巨大な階段と大きなよろいの夢を見てこの作品を書いたことは有名である。階段が何より重要なモチーフなのである。cf. Intro-

duction to *The Castle of Otranto* by Andrew Wright pp. xi — xii

- 12) 城に先祖からの血筋をひく城主ではなく潜主がいるというこのゴシックの趣向は Otranto 城の Manfred から Udolphe 城の Montoni そして Scott の *The Bride of Lammermoor* における Ravenswood 城の Sir Ashton まで続く。偽りの遺言状により城主となるという、主題は Trollope に引継がれ、*The Eustace Diamond* (1873) の Lady Eustace, *Orly Farm* (1862) の Lady Mason の罪をあばく仕掛けとなっている。そしてもちろん、Wilkie Collins の *The Woman in White* の Blackwater の主人 Sir Percival も潜主であることが、謎を呼ぶしかけである。
- 13) *The Mysteries of Udolpho* では後述するように、hunter の服装の Valancourt が Emily 父子を助ける。又、*The Bride of Lammermoor* では、やはり狩をしていた The Master of Ravenswood が、Lucy Ashton を助ける。このように主人公達の出会いは牧歌的伝統にある。
- 14) Isabella を救う Theodore が Isabella の住む城の真の城主であるように Lucy を救う The Master of Ravenswood が Lucy の住む Ravenswood の真の城主である。
- 15) William Beckford, *Vathek* (1787) (Harmondsworth, Middlesex; Penguin Books, 1968)
- 16) Elizabeth MacAndrew, *The Gothic Tradition in Fiction* (New York: Columbia Univ. Press, 1979) p. 129
- 17) 小川和夫「W. ベックフォードを巡って」、『ヴァセック』（東京：国書刊行会，1980）小川和夫訳 解説 p. 172
- 18) Elizabeth MacAndrew, *ibid.*, p. 73
- 19) Mary Shelley, *Frankenstein* (Harmondsworth, Middlesex; Penguin Books, 1968) 以下引用はこの版による。
- 20) 人々に嫌われて *Frankenstein* は miserable だ、人の愛をえられないと知ったから、恋人を作ってくれという Oh! My Creator, make me happy; let me feel gratitude towards you for one benefit! Let me see that I exite the sympathy of some existing thing; (p. 413)
- 21) Elizabeth Mac Andrew, *ibid.*, p. 100
- 22) Victor が怪物を完成した時の描写の語に grotesque だと表わされている。‘catastrophe, wretch, horrid, horror, shrivelled …’ (p. 318) ‘monster’ (p. 319)
- 23) Ann Radcliffe, *The Mysteries of Udolpho* (1794) (Oxford: Oxford Univ. Press, 1966: rpt. 1984) 以下引用はこの版により巻数と頁数のみで示す。
- 24) ジャン・B. ゴードン志村正雄訳「廃墟としてのテキスト——ゴシック意識の考古学」、『城と眩暈』小池滋，志村正雄，富山太佳夫編集（東京：国書刊行会，

1982) pp. 410 - 11

25) Edmund Burke の sublime の 7 つの条件 obscurity, power, privation, vastness, infinity, succession, uniformity; Burke *ibid.* pp. 95 - 135

26) Elizabeth Mac Anelrew, *ibid.*, p. 131

27) Ravenswood (黒) と Lucy Ashton (白) 又は光 (*The Bride of Lammermoor*), Blackwater Park (黒) Limeridge House (光) の Laura Fairie (白) (*The Woman in White*)。もちろんこれは Hawthorne, Poe, James など American Gothic にまで伝わる伝統となる。

28) 野島秀勝, 同上書, p. 273

'Explanatory Notes' to *The Mysteries of Udolpho* by Frederick Garbor p. 674

29) Bonamy Dobrée, 'Introduction' to *The Mysteries of Udolpho*, p. viii

30) *Ibid.*, p.x.

31) 野島秀勝, 同上書, p. 273

'Explanatory Notes' to *The Mysteries of Udolpho* by Frederick Garbor p. 674

29) Bonamy Dobrée, 'Introduction' to *The Mysteries of Udolpho*, p. viii

30) *Ibid.*, p.x.

31) *The Castle of Otranto* でも Matilda の死に嘆く Theodore よりも, Matilda の死のことばが, はるかに理性的で気高い女性を示す。又 *Vathek* において, Nouronihar と Gulchenrouz の関係で, Nouronihar が支配的なのは明白であるが, *Vathek* との関係においても, Nouronihar との恋に迷って悪の知識探求を忘れた *Vathek* をもう一度悪へ誘うのは Nouronihar という魔女であることに注目したい。この伝統は Collins の *The Dead Secret* (1857) において, Porthgenna Tower の相続人 Rosamond とその盲目の夫 Leonard Frankland の関係, *Wuthering Heights* の Catherine と Heathcliffe の関係にもみられる..

32) Ann Radcliffe は, Walpole の用いた conventions を踏襲したばかりでなく, 風景の重要性の他に不思議などこからともなく聞える音楽や歌声, *Tempest* にも似た嵐の海での遭難とそれを知らせる大砲の音, Marchioness の死んだ日のままに残された閉め切りの美しい室, これまでの中年の悪人の他に Lady Laurentini という美女の悪人と, その美女が悪事のあと気のふれた修道女となって世に隠れ住むという新しい conventions を作り出した。

33) Elizabeth MacAndrew, *ibid.*, p. 247

34) 井出弘之「現代イギリス幻想小説と〈ゴシック〉」, 『城と眩暈』, p. 119

35) *Ibid.*, p. 248

36) 井出弘之, 同上書, p. 137